

インフラツーリズムが獲得するもの

土木と観光の接続

社会のあらゆる場面で価値観の多様化が進み、さまざまな領域で情報化が加速し、さらに感染症のリスクが突きつけられる中で、観光業は大きな変革を余儀なくされている。すでに団体行動中心のパック旅行を前提としたビジネスモデルは立ちゆかなくなり、個人客を中心とする新しい観光のありようが模索され続け、体験型・交流型の要素を取り入れたテーマ性が強い旅行形態に注目が集まっている。そして最近、橋やダムなどのインフラ施設が絡む観光に、あらためて「インフラツーリズム」という概念が与えられ、旅行メニューのひとつとして成立しはじめた。

そもそもインフラ施設は、重力・水圧・熱応力などの物理現象に向き合う技術に基づきながら、地理・地形・気候などの環境条件に起因する地域特有の課題に個別に対応してつくられている。さらに、時代背景、経済環境、地域社会などの影響も反映されている。その結果、圧倒的なスケール感やリアリティー、機能性や経済性優先のダイナミックな造形、大胆さと緻密さの混在などの魅力が表出してくる。つまりインフラの景観は、逆に遡っていくことで地域の成り立ちを深く知ることができるばかりか、観光行動の出発点となる感動体験や面白さを十分に備えているコンテンツになるのだ。

インフラツーリズムの登場は、これまで「見られる」ことをあまり意識してこなかった土木の世界に、突如として新たな価値観がもたらされたよ

うにも見える。このドラマチックな展開の背景には、社会とともに揺らぐ土木のイメージの変化が根底にあることを意識しておきたい。

土木のイメージの変遷

私は大学で「デザイン」を学んだが、土木に関する知識はほとんど無い状態だった。それにもかかわらず、縁があって卒業後に土木の世界へ飛び込んだ。そして早々に、「これほど社会的意義がある仕事なのに、なぜ社会から疎まれていたのだろうか」という疑問が生じた。そして、10年近く携わった設計業務を通じて、土木側の慢性的なコミュニケーション不全が根底にあるのでは、という考えに至った。

戦後復興から高度経済成長を経てインフラ整備は急拡大し、人々の期待は「安全」から「安心」、さらに「快適」へとシフトしていった。その流れの中で、労働問題、環境問題、汚職問題などに関わりつつ、バブル経済の崩壊とともに建設投資額が減少に転じた。そのためインフラのリアリティーが感じられにくくなり、心理的距離が生じ、負のイメージが増大していったのだろう。その一方で、土木業界の大部分は社会との距離感やその変化に興味を持たないほど、内向きの姿勢になったのかもしれない。

そんなことを考えながら、私は土木業界からいったん身を引いた。しかし、土木がつくり出す景観には以前にも増して魅力を強く感じるようになり、趣味的なスタンスでインフラ施設を眺めていた。すると、ダム、水門、ジャンクション、鉄



千葉工業大学 創造工学部 デザイン科学科 教授 ^{はちま}八馬 ^{さとし}智

塔、工場などを対象に、感動体験や面白さを見出しながら「鑑賞」し、その情報を他者と共有しようとする人が少なくないことを知るに至った。その動きは、2000年代の後半から数多くの写真集が出版され、各種メディアに取り上げられるなどの形で世間に知られるようになった。

それと同時に、かつての過剰な公共事業批判への反省や本質を見極めようとする冷静な観点、さらには、多発する自然災害が浮き彫りにしたインフラの基本的な役割への認知などが重なり、社会における土木のイメージが徐々に好転してきたと考えられる。

このことは土木業界にとって、社会とのコミュニケーションを適切に図る大きなチャンスと言える。これらの事象がインフラツーリズムの素地を形成してきたと捉えられる。

健全なコミュニケーションの好機に

現在のインフラツーリズムに至るひとつのきっかけは、国土交通省東京国道事務所が2003年から3年間実施した、エンターテインメントを交えながら日比谷共同溝の工事現場を一般公開した「東京ジオサイトプロジェクト」であろう。この一連の見学会は、社会の中に隠されたインフラ建設の現場を知りたいという需要が確実にあることをいち早く示した事例と言える。また、宇部・美祢・

山陽小野田にて2006年より実施されている産業観光プログラムの「大人の社会科学見学（CSRツーリズム）」や、土砂災害が多い北安曇郡小谷村にて2012年より実施されている「土木アート砂防ダムめぐり」などは、先駆的でありつつも、現在に至る持続性を備えている。そこには参加者それぞれの知的好奇心を満たすコンセプト、対象を狭く深く掘り下げるコンテンツの磨き方、客層を適切に絞り込む設定の仕方など、多くのヒントが含まれている。

過去に私がコーディネートしたツアー企画では、このような先行事例のエッセンスを参考にしてきた。具体的には、対象の特徴を愚直に見つめ直して参加者の興味を刺激するポイントを絞り込むこと、その企画がなにをもたらしのかの目標設定を明確にして広く浅い思考に陥らないようにすること、参加者が楽しむよりも前に関係者同士が「面白いがる」ことなどを目指してきた。

振り返ってみると、インフラツーリズムを実践することは、インフラ施設とエンドユーザーたるツアー参加者との間に「信頼」をつくる行為に他ならないのかもしれない。だとすれば、やがて土木と社会を健全な関係に導く有効なコミュニケーションツールのひとつになるだろう。そして、持続的に取り組むこと自体が、これからの土木にとっての価値を生み出すだろう。

【著者紹介】 八馬 智（はちま さとし）

1969年千葉県生まれ。千葉大学工学部工業意匠学科卒業。同大学院修了。株式会社ドーコンに勤務したのち、千葉大学を経て、千葉工業大学へ。2017年より現職。専門は景観デザインや産業観光など。都市鑑賞者として、さまざまな形で土木の魅力を伝える活動をしている。工学博士。著書『ヨーロッパのドボクを見に行こう』（自由国民社）ほか。